

2011年11月11日「野々市市」市制施行記念

野々市歴史イベント 秋季企画展

野々市発掘ヒストリー



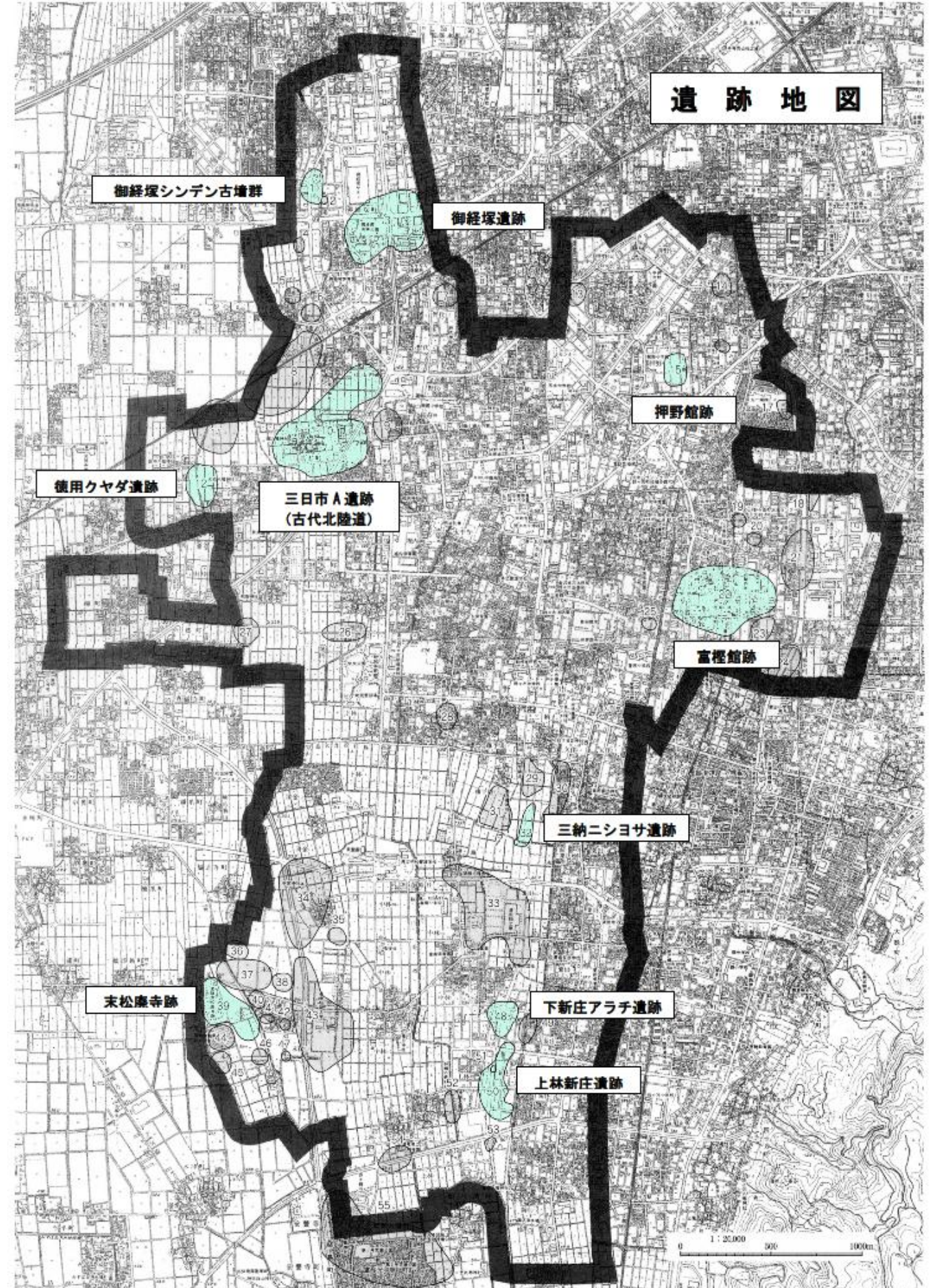
平成23年11月3日(木)～11月13日(日)
9:00～17:00

文化会館フォルテ セミナールーム

平成23年11月15日(火)～11月30日(水)
10:00～16:00

ふるさと歴史館(21日、24日、28日は休館日)

◆お問い合わせ 文化振興課 TEL. 076-227-6122



はじめに

野々市市は、白山を源とする手取川によって形成された手取川扇状地にあり、その恵まれた自然環境から縄文時代後期（約 4,000 年前）より人々の営みがありました。

当時の人々が生活した痕跡は地中に埋まり遺跡となりますが、発掘調査を行うことによって再び現在によみがえります。

市内で初めて発掘調査が行われたのは、1937 年（昭和 12）の末松廃寺跡で、1956 年（昭和 31）には御経塚遺跡の発掘調査が始まりました。歴史的価値の高い両遺跡は国史跡に指定され、現在は史跡公園として人々の憩いの場になっています。

昭和 40 年代後半より野々市市は、都市開発によって街並みが大きく変貌していき、それと同時に遺跡の発見も相次ぎ、発掘調査の件数も増加していきました。

発掘調査の実施は、地域史解明の重要な手がかりを与え、野々市市はもとより加賀地域の歴史像を考えるうえで大きな成果を挙げました。

今回の企画展は、70 年ほど前から行われた市内の主要な遺跡の調査成果を、発見された出土品や調査時の写真を通して紹介します。

すえまつはいしあと 末松廃寺跡

末松廃寺跡は、^{はくほう}白鳳時代末の 660～670 年頃に建立された古代の寺院跡です。

1937 年（昭和 12）に地元の^{たかむらせいこう}高村誠孝氏の発案で発掘調査が行なわれました。この調査により古代の寺院跡であったことが初めて確認され、1939 年（昭和 14）には国の史跡指定を受け、後世へ守り伝えられることとなりました。その後、1961 年（昭和 36）には高村氏による^{わとうかいちん}和同開珎銀銭の発見があり、史跡の公園化を前提とした本格的な発掘調査の実施が望まれました。

1966・67 年（昭和 41・42）には文化庁によって発掘調査が行なわれ、東西幅が約 80m ある土堀内に、金堂を西、塔を東に並立させた^{ほつきじ}法起寺式の^{がらんはいち}加藍配置をとる北陸最古の寺院の一つと判明しました。金堂の規模は東西 19.8m、南北 18.4m と飛鳥・白鳳時代においての一般的な大きさですが、塔の一辺の長さは 10.8m と非常に大きく七重塔とも推定されています。また、金堂の周囲からは屋根に^ふ葺いた大量の^{かわら}瓦が出土しています。これらの瓦は、能美市の^{ゆのやようせき}湯屋窯跡で焼かれ運ばれたものであることがわかっています。

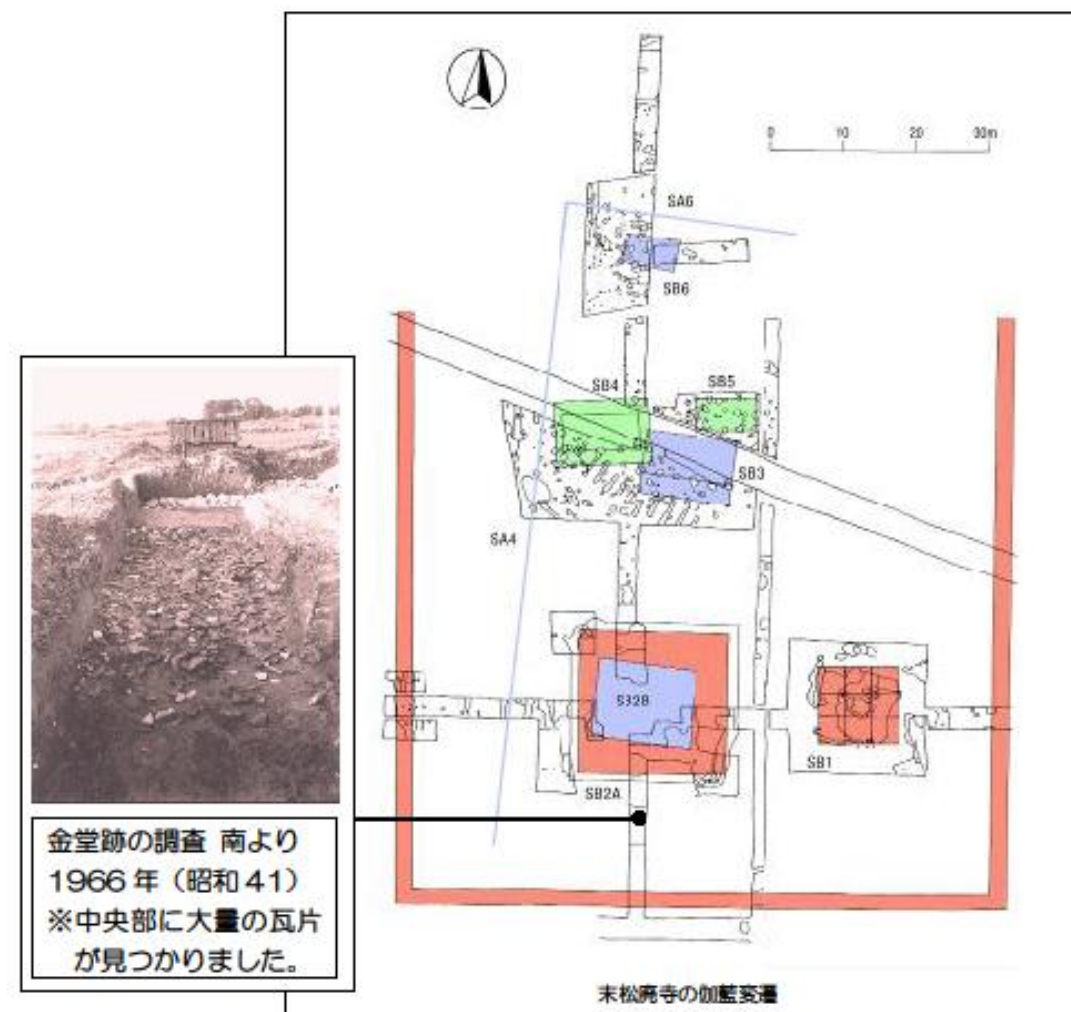
建立の主体者は、当時の北加賀地域を支配していた豪族の「^{みちの}道^{きみ}君」であるという説が通説化されてきました。しかし、最近の研究では、出土した遺物に加賀南部・能美地域産の土器が多くみられる

こと、これまで青戸室石であると思われていた塔心礎が手取川の転石を加工した安山岩である可能性が高いことなど、加賀南部地域の強い影響があるとして、当時南加賀の豪族であった財部氏などが寺の建立に大きく関与していると報告されました。ただし、道君が建立に関与していなかったとの確証は得られていません。当時の道君の勢力を考えると、その存在の大きさを無視して寺の建立を成し遂げられるはずはなく、その関与の仕方が注目されています。

当時の寺院は誰もがお参りにいけるようなところではなく、建立した豪族が一族の繁栄を願い、その権力を誇示する側面が強いものでした。



発掘調査に参加した末松村の村人と出土品 1937年(昭和12)



金堂跡の調査 南より
1966年(昭和41)
※中央部に大量の瓦片
が見つかりました。

末松廃寺の加藍変遷

- 白鳳時代(創建時)の末松廃寺
 創建時の金堂(SB2A)、塔(SB1)は50年余りで倒壊しています。その倒壊は725年頃までの時期とされています。
- 奈良時代の末松廃寺
 空白期間を置いて750年~800年頃に金堂(SB2B)が規模を縮小して再建され、北方には廻立柱群(SA4・6)で囲まれる廻立柱建物(SB3・6)が存在します。
- 平安時代前期の末松廃寺
 800~850年頃には廻立柱建物(SB4・5)が存在します。塔跡から瓦塔が出土しており寺院としての形を保っています。

おきょうづかいせき 御経塚遺跡

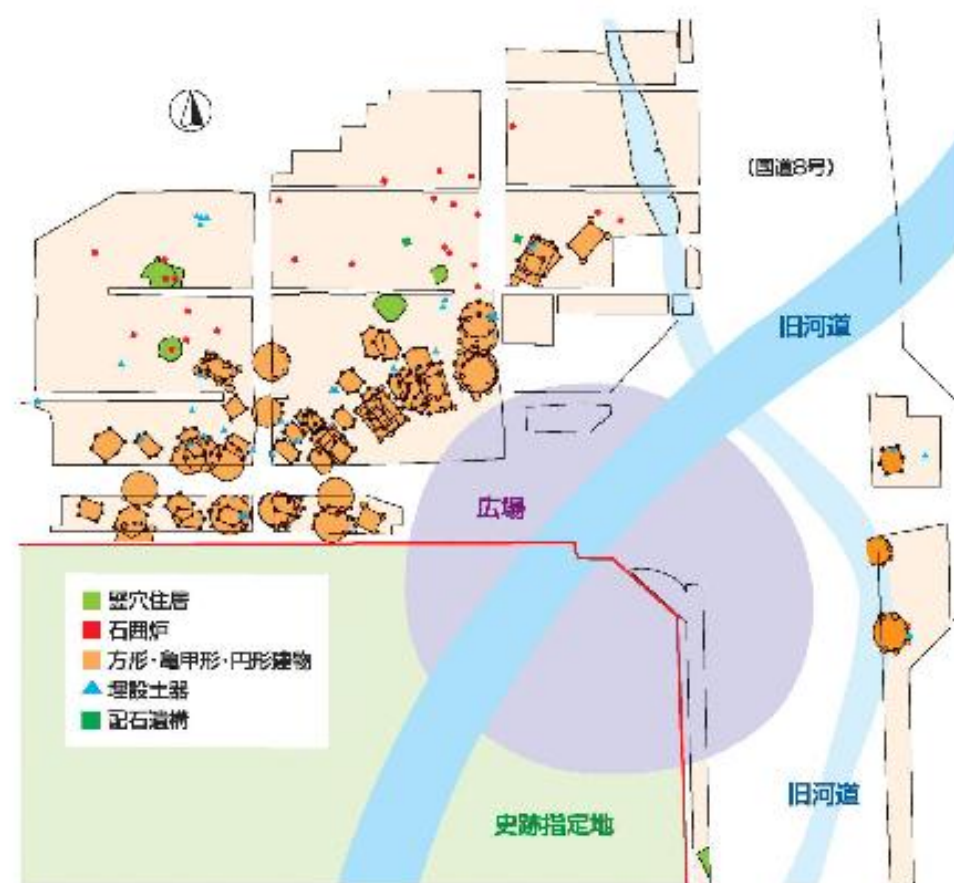
御経塚遺跡は縄文時代後期中葉～弥生時代初頭(3,700～2,500年前頃)にかけて存続した集落です。

遺跡の存在は明治時代から知られていましたが、1954年(昭和29)に中学生によって土器や石器が発見され、遺跡の所在地が判明しました。1956年(昭和31)に行われた第1次発掘調査では御物石器の埋納遺構の発見や、出土した土器の研究から北陸地方で晩期前半(3,300年前頃)の指標となる御経塚式土器が設定され注目を集めました。

1956～96年(昭和31～平成8)にかけて行われた28次にわたる発掘調査によって、集落は中心部に共同の祭祀・集会の広場をもち、その周りを住居が環状に囲み外縁部は墓域となる構造が分かりました。住まいについても、縄文時代後期は竪穴住居であったものが、晩期からは掘立柱建物に変化することが確認されました。一時期の集落は2～3棟の住まいが一群となり全体で5～6群ほどが展開し、人口は60～100人ほどと推定されています。

出土した土器、石器はおびただしい数にのぼります。食物を煮炊きした土器や、木の実を磨りつぶした磨石と石皿、狩猟に用いた石鏃、祭祀・儀礼・呪術に用いた道具の土偶や不思議な石製品の石棒、石冠、御物石器などは当時の生活をしのばせる貴重なものです。また、

東北地方と同じ文様が描かれた土器や新潟県糸魚川産のヒスイの玉類から、人々の移動や交易を知ることができます。



御経塚遺跡主要遺構略図



上空からみた史跡公園と発掘調査地 北から
1992年(平成4)



調査に参加した人々 1975年(昭和50)

おきょうづか 御経塚シンデン古墳群

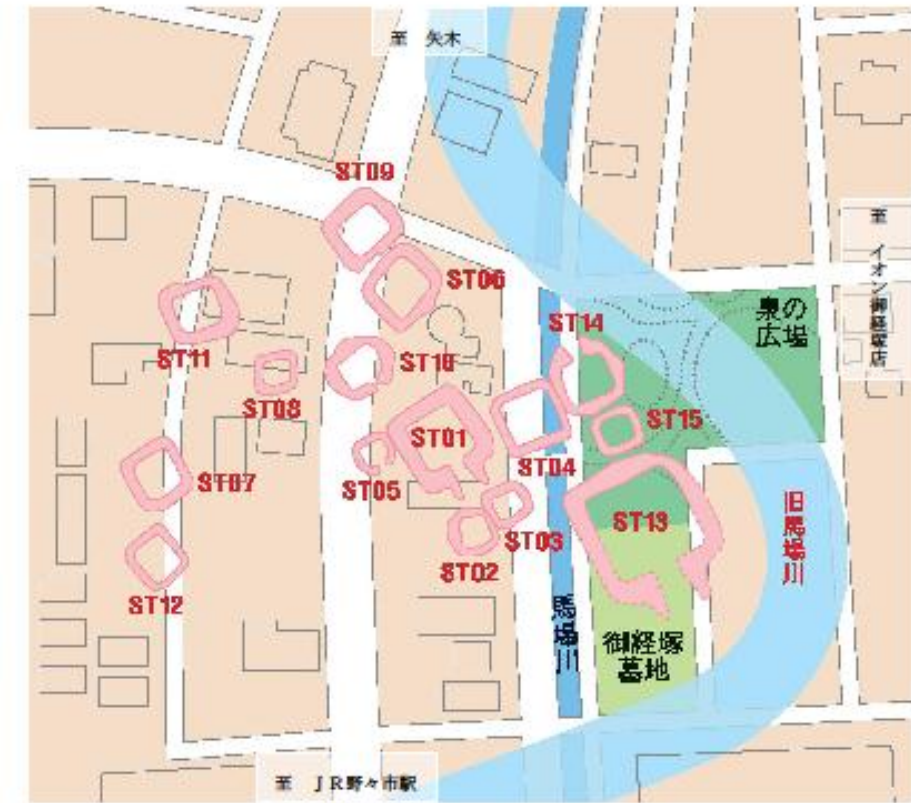
御経塚シンデン古墳群は1986～96年(昭和61～平成8)に行われた発掘調査によって発見されました。古墳の本体部分はすでに破壊されて残っていませんでしたが、周囲をめぐる溝が発見されたため、古墳の存在が分かりました。

発見された古墳群は古墳時代前期の3世紀終末から4世紀中頃に作られたもので、4基の前方後方墳ぜんぽうこうほうらんと11基の方墳ほうらんによって構成され、大きなものでは推定で全長約44mを測ります。

弥生時代以来の稲作の発展による集団の人口増加は、新たな居住地と耕地を求めることになって、土地をめぐる集団間の抗争をひき起こし、力の強い集団が一方を支配下におき、集団や人々に身分差の階層と政治的に統治する首長層を生み出しました。首長層の力の誇示こしとその実権をヤマト政権が承認したことを示すものが古墳の築造でした。

シンデン古墳群は、この地にあった弥生時代後期後半から古墳時代初頭まで続いたムラを移動させて造墓されています。

古墳群の築造から約300年後にあたる古墳時代終末頃には、墳丘の一部を破壊しムラが形成されており、かつての権力者の威厳いげんは忘れ去られていたことが窺えます。



御経塚シンデン古墳群分布図



上空からみた前方後方墳 (ST01)
1987年(昭和62)



発掘調査風景 西より 1986年(昭和61)

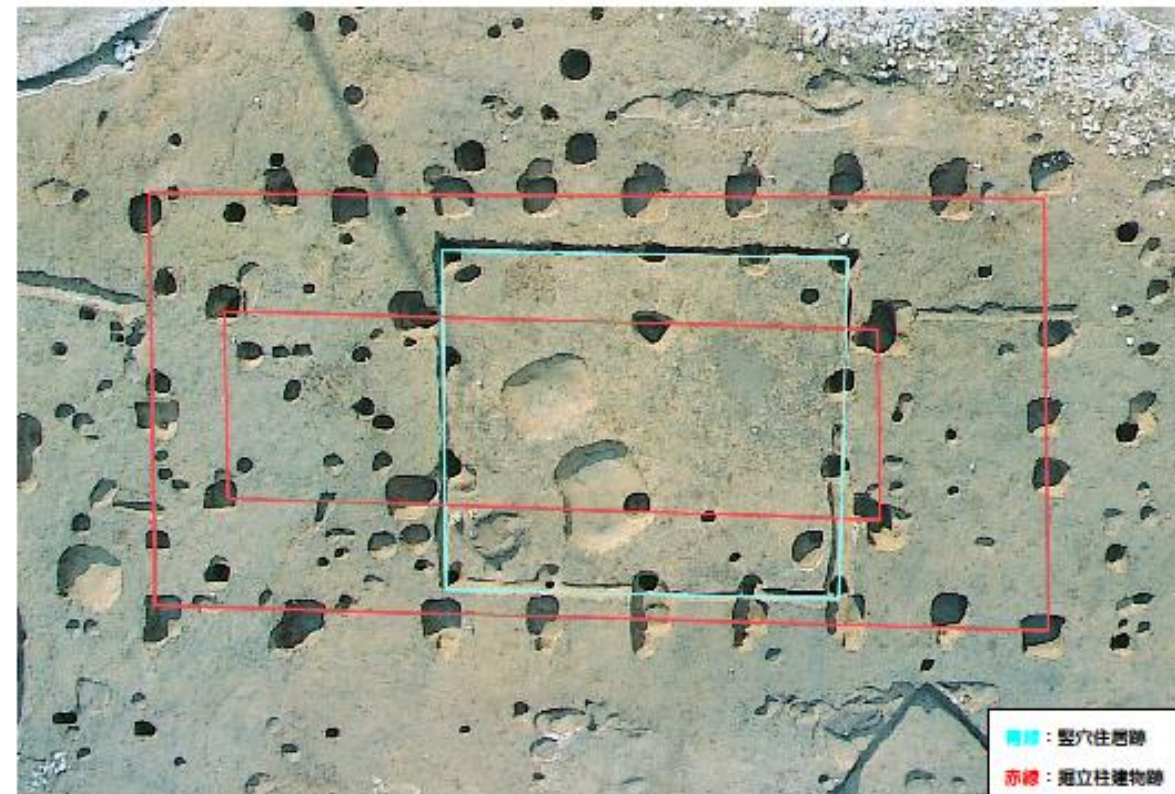
下新庄アラチ遺跡・上林新庄遺跡

下新庄アラチ遺跡・上林新庄遺跡は1990年～1996年（平成2～8）にわたって発掘調査が行われ、古墳時代後期から奈良・平安時代（7世紀初頭～9世紀末）の集落の営みが確認されています。

下新庄アラチ遺跡では^{立てあなじゆうきょ}竪穴住居48棟、^{ほったてばしらたてもの}掘立柱建物54棟が見つかりました。同時期では大型建物を中核として、主屋または副屋建物10棟、倉庫施設4～5棟で構成されたと考えられ、奈良時代後半（8世紀後半）には竪穴住居が掘立柱建物へと変わる大きな転換期があります。遺物は、^{すえきつさ}須恵器^{つち}土器など生活容器の土器が多く出土していますが、役所関係や寺院の遺跡で認められる^{えんめんけん}円面硯^{りょう}や^{りょう}仏具の^{りょう}稜碗も見つっています。円面硯は文字に通じた人物の存在を裏付け、木簡などに記録を残す役割を担っていました。稜碗は金属を写した^{ひん}仏器の一種で、当時この地に仏教が浸透していたことを示します。

下新庄アラチ遺跡の南隣に位置する上林新庄遺跡からも同時期の大型掘立柱建物や^{てっぽつ}仏器である鉄鉢が発見され、仏教関係の施設が存在した可能性があります。

このように、両遺跡は一般的な集落遺跡には見られない規模の大きな建物と出土遺物から、古代の^{ほやしごう}拝師郷をまとめていた郷長級の居住地であった可能性が指摘されています。



竪穴住居から掘立柱に造り替えられた建物跡 上空より 1996年（平成8）
（下新庄アラチ遺跡）



発掘調査風景 北より 1994年（平成6）
（下新庄アラチ遺跡）

しゅごしょ とがしやかたあと
守護所 富樫館跡

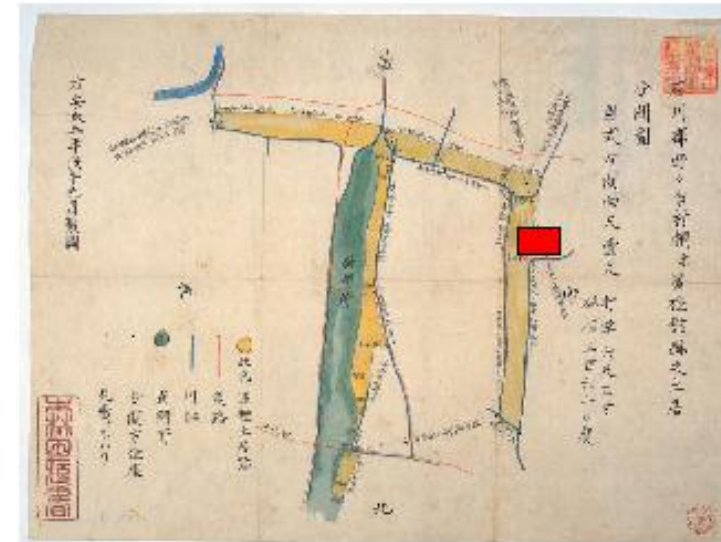
富樫氏は、^{ふじわらとしひと}藤原利仁の流れをくむ加賀斎藤氏の一族で、高橋川中流域の富樫郷を拠点としました。同じ斎藤氏の一族で先に勢力を強めていた林氏は、1221年（^{じょうきゅう}承久3）の承久の乱で朝廷方につき衰退します。富樫氏は幕府方についたことから、加賀における武士団の筆頭となりました。

1335年（^{けんむ}建武2）、富樫高家は加賀国の守護に任じられ、館を野々市に置きます。富樫氏が構えた館が、政務を司る守護所にあると考えられます。1488年（^{ちやうきやう}長享2）、守護富樫政親は一向一揆によって敗北しますが、その後政親の^{おおおじ}大叔父の富樫^{やすたか}泰高が守護職を引き継ぎます。しかし、実権は一向一揆がもち富樫氏の勢力は衰えていきます。一向一揆と^{おだのぶなが}織田信長の抗争が始まった1570年（^{げんき}元亀元）に復権を企てた富樫^{はるさだ}晴貞は一向一揆に討たれ、富樫氏は滅亡します。富樫館はこれ以降に廃絶していったと思われます。

江戸時代の1858年（^{あんせい}安政5）に森田平次は、富樫館を測量して絵図を描いています。絵図には^{ぼうえい}防御のため館の周囲を囲っていた土居の一部を記しています。

明治時代に入ると、館とその周辺は水田耕作のため土居が崩されて整地され、その痕跡をみることができなくなり館の場所はわからなくなりました。

しかし、1994年（平成6）の発掘調査で、土居の外側に掘られた堀の一部を確認できました。堀は、幅が6~7m、深さ2.5mの規模で、14~16世紀前半の陶磁器や鏡が出土しました。調査面積



富樫館跡絵図 1858年（安政5） ■：発掘調査推定地

は小さく、館の全貌はわかりませんが、その場所が明らかとなり大きな成果をあげました。

現在、発見した堀の場所は、広場として開放されています。



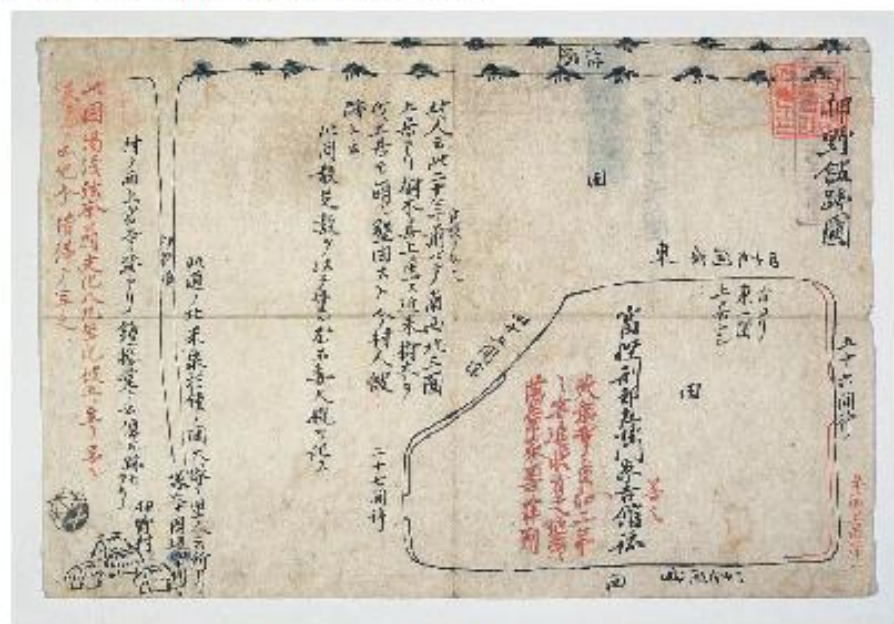
発掘された堀 1994年（平成6）

おしのやかたあと 押野館跡

押野館跡は館野小学校の南東一帯にあり、室町時代の富樫一族の館です。館主は1335年(建武2)に加賀国守護となった富樫高家の弟家善で、「押野殿」と呼ばれていました。

江戸時代の1811年(文化8)頃、加賀藩士湯浅玄斎は、当時の館の状況を絵図に描いてまとめています。絵図によると、大きさは東面49間(約88m)、南面56間(約102m)、西面87間(約158m)、北面27間(約49m)、東北面45間(約82m)で、周囲の一部には防御のための土居が記されています。

1980~84(昭和55~59)と1993・94年(平成5・6)に発掘調査が行われ、館の周りを囲む大きな堀や掘立柱建物、竪穴状遺構、井戸跡などを発見し、14世紀頃の生活道具であった瀬戸焼の壺、鉄製の鋤先などが出土しました。



押野館跡絵図 1811年(文化8)



館の内部の様子 北西より 1993年(平成5)



発掘調査遠景 南東より 1983年(昭和58)

さんのう いせき とくもと いせき
三納ニシヨサ遺跡・徳用クヤダ遺跡

野々市では近年、中南部地区と北西部地区において区画整理事業が実施されています。この事業に伴う発掘調査によって、それぞれの地区から中世の村の跡が発見され、北加賀地域における中世集落の状況が明らかになりつつあります。

中南部地区にある三納ニシヨサ遺跡は、2000～04年(平成12～16)にかけて発掘調査が行われました。この遺跡は手取川扇状地の扇^{せんだんぶ}中央部に位置し、大小の礫に覆われた土地に集落が形成されています。集落には掘立柱建物や^{ほったてばしらたてもの} 堅穴状遺構・土坑などが密集しており、^{なま} 珠洲焼、^{えちぜんやき} 越前焼など国産の陶器のほか中国から輸入された^{せいじ} 青磁等の磁器、さらには菊や鳥の絵柄のある銅製の鏡も出土したことから、集落内には周辺地域を支配した有力者が居住していたと考えられます。出土遺物から14～15世紀を中心とした集落が存続したことが分かりました。

一方、北西部地区にある徳用クヤダ遺跡は、2004年(平成16)から発掘調査を行っています。徳用クヤダ遺跡は扇状地の^{せんだんぶ}扇端部に位置する室町時代の集落跡です。発掘調査では大小の区画溝で区割りされた宅地が確認されました。宅地内には掘立柱建物や堅穴状遺構、土坑などが認められます。区画溝は規則的に配置されており、計画的な宅地割がなされています。

遺跡の一角には大きな溝で囲まれた宅地を確認しています。この宅地内には掘立柱建物群、大型の土坑や堅穴状遺構などが複数確認



発掘調査風景 北より 2006年(平成18)
(徳用クヤダ遺跡)

されました。また、出土した遺物には中国製の^{せいじこうろ} 青磁香炉や^{けびょう} 青磁花瓶、^{こいし} 墓石など特殊な遺物が出土していることから、この宅地は有力領主層の屋敷地にあたると思われる。



^{いしれき} 石礫に覆われた集落跡 南東より 2000年(平成12)
(三納ニシヨサ遺跡)

ほくろくどう 古代北陸道（三日市A遺跡）

三日市A遺跡は、三日市町のほぼ全域と二日市町の一部に広がる広大な遺跡で、2000年（平成12）より発掘調査を実施し、縄文時代・弥生時代・古代・中世にわたる集落遺跡が発見されています。

古代において特筆すべきは奈良・平安時代に機能した官道（国家によって整備・管理・維持がなされた道路）のひとつである古代北陸道が確認されたことです。路面幅は8mで、両端には側溝が設けられています。調査により総延長約530mの区間が確定されました。

また、確認された古代北陸道の約150m北西には8×2間の大型掘立柱建物が発見され、建物の向きも北陸道に対して平行であることから密接な関係があると考えられます。建物の規模が極めて大きい

ことから一般的な建物とは考えにくく、公的施設と推測されています。

これらの発見は古代交通史を考察するのに大変貴重であるといえます。県内ではこの他にも能登国と越中国への分岐点となる津幡町加茂遺跡や、旧国道8号に並走する形で確認された金沢市観法寺遺跡などで北陸道が報告されています。



人が立っている箇所が路面です。東より 2003年（平成15）



8×2間の大型掘立柱建物 北西より 2005年（平成17）